稗史年表

黄表紙目録

自安永四年
至文化三年

全

へ13
1945

へ13
1945

門
へ遠日13
1.945

稗史年表

凡例

全編分て五巻とし第一巻を赤本部と名け貞享元禄の比より元文の比まて出る此類并に評判記文に出せる草子の摘語類より古作の薩摩の正本類又ハ享保の比出し桃太郎の昔噺類を記せり稲妻表紙唐紙表紙の類をも併せ載たり

第二巻を黒本部と名け元文寛保の比より安永三年にいたる青本の始より一代記敵討の類鱗形屋山本の板行の分を載たり

第三巻を後の青本部にて安永四年より文化二年まで
至る恋川春町作の金々先生出しより稗史の画作
ものゝ名様に一変して高名の作者競起して滑稽洒落
をつくしたる三十余年のものをもつて一巻とし

第四巻を合巻部にて文化三年より文政年中
いたる雷太郎のかたき討出てより合巻は年々盛大なり
行はれ世上此絶えて敵討の部に一統せしより又戯場
の躰を写して盛るまでにいたれり

第五巻を近世の合巻部にて文政　年より清き抱の
始めてより明治今にいたるまでを記す

安永の末天明の初に刻せし袋入の書目を別記して
附録とす又此部に標題題簽を附して巻毎に付せし書肆
よりして嵐の袋入いろは短歌および新口合の類を総括し
此表題を標表して俳優の姿絵集に至る
毎巻個にしめて年号干支を掲げ其作者画工の名を
集め載せ次を三層に分ちて書肆の蔵名を記し毎年
新刻の書目を並べ各冊に其序記（アイ）識（シルシ）又は画工
の名を志るしも中に摘要して数条あげて稗史縷載の
沿革画作の記原及び当時の評論を載せ
およそ一二稗史のはじめ新刻の年号をとゞめたるに寛政

此外に就る甚の所為ハ年号を記する事の多くして
考證しかたし彼是と思ひ合して読々分明なることを
得る事の安永の頃まて書る亡きハ考證すへ
かゝさる事の出来いたる故ハ年表の内上二層に年号
分ちたるものを書の世下の一層ハ頃数の部として
年号詳ならさるを載せたるの考證をなす
東本銘いよりし年序ハ猶しかしなから年表をかゝる
ことあらんの後にて年号の知つる其の書目の下に記し
後を右の書を又類を分ちて物を物語類とし洒落
西本類とし洒落を滑稽よりて読本の類として唐織書第

稗書類も此中に雑載たりといへとも世の通称に
随ひてすへて赤本と称せり
抑それ稗史ハ繊少の物といへとも能く当時の風俗
を写したるを以て世の教化にあつかる事多しさる故に
淫褻に流れ奢侈に移する時ハ官制有ことをとらむ
されとも此小冊ハ一時の遊戯にして官制のことにいら
なきこへにあらむ故に何ゝ事此旧時ハ与世人の見
耳を驚かす事を記して書肆の絶えさるの用ひよりて
出するに致らしむ今篇中に縁りて出して悦ぶる
ことを予の甚しき記とすての諸此に記すること

為廻し

帝國圖書館藏

稗史年表

漣水散人輯

后青本之部

自安永四年乙未至文化三年丙寅

安永四年乙未

作者　恋川春町　丁
耕雪亭桂子　圭

画工　鳥居清経　六
富川吟雪　口
恋川春町　丁

満清

此草紙大当リニテ是ヨリ青本ノ趣向変ス

鱗形屋

金々先生栄花夢 二 丁

大福富つき娘 二 清経画 丁

六 水車ちんの皇 三 清経画

一休髑髏の九年母 三 清満画

三人かたこ真の談す 三 ロ上

外濱うとふ物語 三

源家再興小かす丸 三

ふいこ系之事ほたて鞍 二

とう男出世乃紙屑 二

~~遊川草紙重追~~

~~華戯作~~

名月の余まん所 二 新撰卑中智畫 二

和物理浅世帯道具 二

子供智恵乃海 二

忠臣蔵の穴くら 二

~~青楼機嫌八十く 二~~

~~風流物老附 二~~

~~風流浦川大むし 二~~

~~桂士作 清経画 二~~

鶴屋

交武峰喜黒北斎

高尾太平記 吽雪画

数道ちて移 二 桂 ズ

奥村

伊勢次

初恋松竹梅 土

花競いろは義 ズ

足から山子抜山姥 ズ

万代矢口渡 ス

西村

寛明おさな物語

出世やつこ ロ

奈良都八重桜 ス

菊寿草序云中昔宝暦十年の年代小の板太郎鉄砲の宇城ま姫く娘をお召を形まし本銭乃絵を紅摺まておせを赤本は中々で読経の大つき時代がれを読ってまへる者まにひ取とより出る草子此卯銭にかつ写摺と有りきり人は鱗形屋

ありしハ古風をうつし来りて短冊綱のみなりしは
写りは赤のミかき出しかん鳥太夫のゑへにてふといの根
かそんかし佐の志やまうりしを思つきし昔ふて二十余年
乃絵草紙本屋金之丞といへる通人おもし将市の草紙
ちゃの名前一変して今やもやしや草紙をいかさま八おらか
みぬきりのきるも移し天明の頃まで鱗形屋の草紙にて
上書紙紅摺にて大いなるしゃをかへしまうる称す此年
鱗形屋上村の前令わんる本令を先生とも重ハ和紙紅摺を
用ひて主役の十三郎もうつし青短冊赤短冊昔の頃のごとし
これハ此年ハ今も先生の和紙のまゝ紅摺をきしたるべし

御法様より来年草秋の比令に先生絵草紙ある古跡
絵草紙ら風を乗せともに徳川春丁の絵画令に先生を
てしめとは此草紙太夫紅摺して三十年来錦絵の鼻祖と
云べし

安永五年丙申

作者 春町 丁

画工 清経 全

吟雪 口

春町 丁

鱗形屋

高慢斎行脚日記 丁丁

舟いくさ源氏の猪記

異別古銭物かたり

浮世風女かゝきり

鶴屋

今様女かゞ清 大

伊世次

桃竹紋つくし 大

四度子武勇物語 土 ス

福天山相撲の芸六 土 ス

豊年踊揃の由来 土 ス

唐大和画修かゞみ

盆おどり男天里

温飩そば大江山 丁丁

今様浮世物語

風流東木比寿

花子かくれん坊

今様小原雑談

玉藻前化物尽 丁丁

たゝ小僧石部金吉

奥村

かくきり代の漂行

伊世幸

生仏百子のかたり

桃太郎手がら噺

西村

金々仙人通言九巻 口

村田

続平家武者揃

街談録云今年より錦彩色草双しの絵草子表紙の標
書をも風を改て表紙の上ハ例年青紙に題号をかき
赤紙に絵を書しが今年ハ紅絵摺にて絵も今様の風を
写して当世錦絵の風の絵となす宝暦十年よりしる
取との題号こそ紅摺となりしか錦彩色ハ古風をうつし
たるのみ也人今まて是を見へさるを改めしか今年古風を亡
書改ることいのこさ抜てより当世此すき絵風といへるハ
明和乃初より出来し鈴木春信か画書出しき絵の事
なりと見えて此書もさき絵の風を草双紙にまた画すなる也
しを春章か出て粗其事画を刷してより後まて今様の絵なれと

古風をうつせし
高情斎新卿か紀金と此年流行して大に行ハる
其頃よりも世上色摺ハ月経斎か筆の絵に擬して再
版行す

安永六年丁酉

作者 春町 丁
喜三二（号明誠堂） キ
鈴木吉路 土
画工 清満 廿
鳥居清長 ト

鱗形
こかねのかそいろ
ことぬきし春雨

桂子 土
錦鱗 巾
清経 ス

鶴屋
柏七遍志らか今時 土ス
むかしゝ猿乃仇打 土ス

吟雪 ロ
春町 丁

伊勢次
今振放下僧 ス
後日菩薩かゝみ

かつさ七笑情
月星子菜の功 士丁
三升目花鱗の乙女 丁丁
ゑらい敵之曽我 キ丁
桃太郎後日咄 キ丁
南陀羅法師柿種 キ丁
女きらひ変化豆男 キ丁
鼻の峯高慢おとこ 丁丁
花見帰あゝあやしいな 巾丁
親の敵うてや腹鞁

奥村
いろ操振三人娘 ト
太平お世話こや ト
菖蒲かた忠孝絵 ス
日待は利生ばなし ト
黒かみひ太平記 ト
松村
三條の浦猫又音咄

国性化物退治 ス
太平お世鉢の木 土ス
西村
紅皿欠皿むかし咄
村田
志の振角力揃 廿

かく紀行あり　春章画　大

海川為恩の吏

甲子續さし枕　拾

恋欄あやつり芝居

衛談録云南年絵草紙錦絵版行春川春丁画作
まち〳〵長三作大ニ行はる南年ハ去年と違ひ毛書を
書織ニなさし荒浅ニ絵をなへさ而ニ紅絵摺ニて
中世活乃如き絵をかきくりけく梅ニ錦絵ハ宇や
芝と錦絵屋絵草紙ニ行はる擬して作る百管の自笑ハ
作を観来して書法く青本より千葉ハ切ハ此頃
行はすして諺下の生死の事ニ擬して作るものか言懐男
て合戦なとの中ニ入れなとせしニ言花より蜀山翁
慍ふると許して白あれ書の元祖也と清事基ナキ楠子の
墓あり某段楠浦作は像かき文あるニあり忠臣楠子ニの
孫として吉原細見ニあり如原とも記せり七年絵草子ニ
行ハ怪〳〵かまつて読すあり春町の本傳の穀書して
大下無してあり流行をあらハ世に付寿き云く

安永七年戊戌

作者 春町 丁
物愚斎抱連 勿
林生 牛
画工 清経 ス
北尾重政 ト
勝川春章 小

鱗形屋
玉や数万年中の彼岸 原
蓬莱山無量寿伝記

桂子 土
四国子 皿
清長 ト
湖龍斎 古
芳川友章 又

鶴屋
相州白ちく女社
子宝喜千のみぢん

薪葉 竹
春丁 丁
蘭徳斎春童 廿

伊世治
足柄山信濃の幽馬
哀乃歌おうら組

太田義隆柳の女夫竹
いろは玉素源氏
三幅対紫曽我 丁丁
間違ひくるわ枝 丁丁
黄金山福徳宝記 ス牛
詞戦あくたいの根 丁丁
芋太郎屋敷の浅茅 丁丁
夷大黒てかきは縁 丁丁
安永七郎大福帳 サ分
酒呑寶日島以白

緒川つみ信田の狸
韜出きて出世橋
早大王雷力伝
陽花十公は宗 ス土
化物箱根の先
庭代丁草る也海 ト
郡のお大宝の皮 ス
かくれ材貝要猫子

西村
豆男栄花は春
○奥村
新田与右代勝 ト
雷貯くひ全 △ ス

山本
松茸賣此郎方（行吉）
岩一戸
まれなり年して
おもしろ梅の忠説

松村
川中隅て華し話（ス）
ゆめの里夢着るの床
いつ井太郎兵衛通

岩戸屋
高慢院鏡見之守
吉原若菜若葉枝（小）
生酔て酒の流（又）

錦絵屋の外錦絵ハ年いかゝし率して又朝の衛之のごとき
形よりして画すし三幅（幅）對葉若我ハ此人の房家の寶氣
此進ミ擬して作る法孫春三ご去る多く若我あり
年来即ち此方の三美良都に微てお藍といふべし

後の事目此語も是より起る松茸賣乃作ハ其作此
草紙に松茸ありへ乞やん（仙）といふを見ひよせ
たる数多し浮世絵女絵乃外に絵に名高き得史
を画し事天明にいたる北尾重政此人より伝へ
めし文化の初にいたる年ニ小物にをあつか
巻末に名を見るさる所絵柄の画風を伝授し
祭識あるし且天明の名にめて名を記てある字給
あり微とす負し

安永八年己亥

作者 喜三二 キ
通笑 マ
画工 清経 ス
北尾政演 ハ

鱗形屋
あんない手本通人蔵 キ丁
七人芸浮世ばなし ス
寿れこゝみの由来
條遊孝文哉 キ丁

桂子 土
文溪堂（嶋峨） 又
清長 ト

鶴屋
花のお江戸三曲ほ鍋 ハ
むかし扇今年の貫 土ス
あいさつ口合布 土ス
くらま峠日月

呉増光 ユ
春町 丁
重政 ユ

伊勢治
浮世はなし剃刀
化物すごろく落條
恵ゝ撫子東海道
大中恵名書ほ縞とき 又ス

化物太平記 ユ

奥村
うそ付弥次郎 マト
金持ゝ酒乃癖 マト
かけ殺ひ西来帰 マト
大悪人宛さかし マト
ゆこゝゝ銭中宿 マト
桃太郎元祖ばなし マト
日本一面板のはなし マト

名在菊苗白長着
卯花かさね奥州鐵 ス

松村
かへ百夜後日は花 ハ

新発富士の高根
教訓鑿のさゝう
いろは縫方

西村
梅てらし ス
朝良ひ恋 ス
あめやみせ ス
織屋此布地
新九郎桃太郎
続へ踏の浮橋 ス

村田

むかし〳〵様と蟹

竹田大からくり

岩戸

金平異國めくり

七福譚観方

さと雀大通仕立

悟談豆人形 又 又

寿歎ミ比叡山

野良行くて海大橋

通笑作この年より里ねる年代記云 安永三二六文字よりまたなるを作里 赤本者人の弟まれる事の究さすし始めりとを枝子通笑作 蔦州のえんとこてむらの多し 寛政の頃

紀定作 蔦州の作は権輿と云ふへし 噂 此月は洒行は迄し洒落本の鹿は書をねぶれ東風俗と同し 洒落本の吟子なるを称せらる又字年の新梅には赤本吟子なるに影ある本同事を記せり 艶本なれは画は不の頭巾を尋ねて 大神を若まをりさこ流の風俗なるへし又云妓を推て日に吉里よ 枝ふかきに今は笑太平あり 悟戒は十日暮里に採ふ小事ちこ生流には日暮里比翁も来 隅田におゐて作らしむて 画工政演今年からねる源に作をいはいこはたらま里

安永九年庚子

作者 通笑 ヤ
山東京傳 上
画工 清長 下
北尾三郎 三
松泉堂 白

鶴屋
酒席採振大丸羽衣
くゝ物見立お芝居 山
敷之丸勧善懲悪 小

文渓堂 又
蹄下逸人 巳
春町 丁
春朗 ラ

蔦屋
誂次郎景清うわさ キ 山
うそ八百万八傳 四 上

四國子 四
窪田春満 穴
政演 小
鬮牛舎秋童 禾

錦鱗 巾
常盤松 ム
春常 ハ
春旭 九

可笑 可

伊勢治
大通ちゑ新 ム 下
遊人三幅対 山
とんだ竹取月 下

ちよん傀儡師の乞せん 山
娘かたき討故郷の錦 上 山

奥村
親父帰子息かせき仇 マ 下
ついそこ土手の蹴出し マ 下
珍説女天狗 マ 下
近頃清めく里 マ 下
浦島太郎二度目の龍宮

山本

通とは此事 山

松村
やさ操振袖の難波欵 山
本はよいつか世の中 マ 下
今様蒔絵の櫛 下
一生懸命三の傳
手前勝手ゆかりの文 下

岩戸

操々出紅葉の浮名 下
知らず知らず北嶋の茶 円 山
画賦三國志 下

西村
銀世界豊年新木 禾
それは言わけ和学 穴 白
蓬莱よりの子宝
自恵のひよくの塚 小
通人三國志
松岡女花苑 下

大はおそ合々合本

村田

桃太郎宝蔵記

むかし噺梅の種　三

山の主おまへ猫　三

紫清若菜の図

娘八丈妹の宿むこ　下　下

十二支持つゞき桃太郎　三　又

さくら花極通人

三里神送江八景

いさちょん郎冊

万寿嶋台乃嶋

鱗形

妻か貝合文章　巾丁

此清ば百紙入と云草紙なら三冊十五丁を今日定也
一冊として叢書を加へ諸経摘の紙に入てあらて
京川春丁楠多部記を著し大平記なる南世の風俗
じつ甲ある根を摘ら表紙に浮して緑る趣を読て

表二三の老生にして見たい記万象亭ら文つくり此年こ
まかせる様に京伝が世界滑稽の見る広見ら浮気と見せ
三分先見て学ぶ本つくる又紙入に織物をつくる五丁に
して全部あらる趣終へて面白さ新版を森三二ら上梓
大小丁ずに勝またら紙銭入の目録い時流にわたら
山東京伝娘かつきおま豹し名をおさと或人会おふし
噺の趣を追人とも京伝の筆是を施い文政月に京伝が
香紙を拾集し新紙同目此種滴の紙出のし噺と同
じ事ある事を述し兎へしと山へ百梅に此本にくら見えと
三幅の興にもとこを頼あるべし

春朗事
勝川春章

門人にして一家の風をなせし俵屋宗理と改め百琳
の号を用ひ北斎辰政なとゝいひ戴斗といひし人也 三次郎
中頃は政美と称し後に蕙斎と号せり

天明元年辛丑

作者
喜三二 キ
芝全交 入
風車
画工 清長
鶴屋
標くらへをはや世新 六入
大違宝舟 二入
當世大色紅閨帳 二入

通笑 マ
可笑 可
南陀伽紫蘭 ナ
蓬莱山人帰橋 ク
重政
政演
蔦屋
見るが徳一炊の夢
源かへ是柳の黒髪 二キ
運ひらく扇の花 六キ

是和斎
政美
春常
伊世次
通すまし妓宅の関
鬼ねら子たから
七笑人直写世すかゝ 六

通一声女忠やく　入

ひやうへいきん猫

ませおを昔に返し　丁 ト

奥村

浪代のはたかり　マ ト

とつと言ていゝ采

百遍ひ月穂の鶴

擲の手房さんとく

かこ浴ゆの張くさ

化物をみるひも番

主従ひよんな物

見等妙案万金丹　十

世わ助之節　リ 一

松村

有難い盃の一字

如見せ此さし原　サ ソ

熊郎実擬えて汁　マ 一

松若吉の付太平記

まちハ佛屋

粋乃よみん八　ト

うん作に本息味　六

かね新恵ん名の叙　六

西村

朝露かうこ捷　丁 ト

毛のそん太郎月

二丁付七加蔵　ト

紅皿かせ四累別話　丁 ト

おろか里山椒之種

化物そこ入娘

村田

縁組連理の鈴

目出たしこや荒

桃太郎一代記

おとし咄菊寿盃

娘子袖河もうさ記　小

岩戸

新夏宝丸山吹入　丁 ソ

化物よつき穂来　丁 ト

極通人由来　丁 ト

万年おむ大建銀

東都名所大清合物

稗史文は能ありの見しより並出て滑稽を誇て今更下界

堂主闇々そのみんこゑし年代記に萃叙しいよし安永まこと

とをらへとして当世風俗此時よりさの甚ること云　又北年号山人

芳叙は評判記を著し　菊寿草のとき芳叙しいおとかの

見ゆる拙く嘉右衛門と云し画工ハ此時代の事なり鱗形の草しの
名を得たる也翌年まで出して拙きものなる
柳は思發ハ去年鱗入の鐘の七人化粧太平記類ハあまたなく
ある画工参考して追記ものなし
清長ハ当世ニ女風俗ニ妙を得たり其後鳥居新ニ猶出
女子作し処生写と女子写と猫ニ画し額むかしより
浮世絵ニ豪化ハ当時ニ猿ゝ乃阿をうけ潤騰と云ふ下し
南陀伽紫蘭ハ其年ニ窪田春満といへると同人なり
後年ニ狂名を号す又尚左堂俊満と号し

天明二年壬寅

作者		
春町 丁	可笑 丁	豊里舟
喜三二 キ	岸田杜芳 土	三椒
通笑 マ	紫蘭 十	魚佛
京傳 亠	宇三太 ㇵ	風物
全交 入	雪岨	古風

画工	
清長 ト	春朗 ヨ
重政 一	國信 三
政演 ㇵ	
政美 ツ	
春常 ㇾ	

鶴屋	蔦屋	伊世次
金々浦物壬比蔵 入一	景清百人一首 キ一	市川三升圖 土ㇵ
強ゑ百巻傳	ひな形いさます新 丁丁	たくさお花の上野 土三
風流天狗のおとし種 入ツ	恒例まちかひ哉 キ一	化物屋人形揃へ ツ

御存商賣物（上 六）
飯きらひ女ハぼうぼう（古 ソ）
息子株毛雅以了
奥村
老生帰乃夢
お朝清坊兄庵店
たとひは案てもは（マ 六）
作系丑の刻系
舌切すゝめ三拾切
猫のよめ入（マ ト）

我好む人の心ざし（丁 丁）
細太悉大悲の換玉
花みさくら若衆由来（十 ソ）
松村
見立大通仕立
寿荘州姫のましなひ
子孫熊坊南夢
通神存らう紙
早筈ろ女ろ印籠（マ ト）
法性くし絞所

花めつし奴茶屋
七福神大黒傳（丁 六）
かさ新字潜分行録（六）
西村
通風いせ物語
小ましれ誕生
地獄の沙金字
養老若人長生
楽こいどんたくさ流（丁 ト）
かさ花梅と桜

村田
今六利生なし
化物箱我物のうち
冬ひかし鏡の龍肌（ソ）
隅田川太平記柳
下手上手いろは雑言
おとしの猫のつるひ玉手箱

岩戸
いすれの福まねき（丁 六）
石やさん曽（丁 上）
昔噺さく桃太郎（丁 ト）
狂言雷の鳴孔
冬ゝ言さ江戸茶（上）

今年も四方山人評判記岡目八目を並べ発兌し此評判記
これ去年まで限りを尽して見たるなり　京伝が戯作も存扇
壹冊をもつて画作の名を顕し文化の士中に早余年の眉

如此究て実に稗史作者中の一人と称へし　小子の浅生
小枝脚の写真学を習ふ年におゐても通人中に京傳
作のむさかりこそ余の好むも枝脚黙格の家有にこそより
此葉で知る事も惜ゆれ画こそして宮岐の初より惜りて画き
出さね事とありとも梅に稗史の富をハ勧懲の一端に
して何事をも流さ行るそも画きさんや京和之妓が死所に比
手柄らしき巻毎に人を殺し此を旅ち種々の惨毒の術を
極めたる人を殺し此を旅つて刑の大なるの色枝脚黙格まで
刑の小なるもの浮世の稗史刑の大なるを惜しみて刑の小なる
を惜る事理にたがふへからさる

天明三年　癸卯

作者
春町　下　喜三二　キ　通笑　マ　京傳　ム　全交　入
杜芳　土　紫蘭　十　里舟　甲
四方山人　四　南杣笑楚満人　人　奈蒔野馬鹿人　大　在原艶美　オ
号門人 新杜　立　春卯　天

画工
清長　ド　重政　ム　政演　ウ　政美　ソ
春潮　月

鶴屋　蔦屋　伊勢次

通言神代比毛　丁丁　大生月たい記　キ丁　よしきの升　土ド
綺比若のお　入一　謡なる大和の切　キ二　通の春霞閏　土六

茶羅の毛通人 入ド
混雑哉くや帰 入六
讃と歌道は一字 オリ
俵子学係をは谷 十六

奥村

本布二千暑 マ六
写遠遊机の女山賢 マリ
牡丹鮮八根を込 マリ
大食亜命の為 マリ

さし此る麻村むし害をト 下下
猿獅とをい昔ゑ臣 下下
三春帰大上めくて キ
愛まつかり左を帳 大下

松村

現金さる鮮 マ一
冨士つるは二人参銘 マ一
ほてつるかう唐は新

新例矢には清
仲の丁豆蒔万女
かく説打三弦の用界 人ド
銀満法目見学愛 土六

西むら

臥天くは足 四一
手被万般に於ぶ衙
よい魂絵記 土月
ほむ々編背衛 リ

よい息子内の宗 マ一
千里そとる席をかい マド

村田

さそく三大まつ リ
おとし帰玉は春 リ
見を化粧おそる感心 リ

岩戸

通人会をゆる臣 可
化扇仲間つまれ 可
仕舞をくそ紛 夫

さんさ亭碑新 甲ド
かねは上野花 一六
こふそくこそい帰 マリ

写方山人の作は三年は因ゐ三郎となるのを楚満人か花
おを犯る廿年まえ傍る文化の流れかきき打れ稗史の

嘴夫と云ふ画工　雁金帳を年代記に喜三二の作とするハ
誤なり又万八偖をも喜三二作として是をも誤りて年代記
誤あり蔦重板中の吟雪と房信と別人としたまへ
衡諺前青年を画の作と云戌年の松葉蔦の一画无
湖龍斎なり又春常　春湖も往く青年に画あり

天明四年甲辰

作者
春町　丁　喜三二　キ　通笑　マ　京傳　ㇳ　全交　入
杜芳　土　亀遊女　〃　楚満人　人　四方山人　四　窪春満　六
万象亭　万　唐来三和　三　黒鳶式部　ヤ　雲楽場窪志芸　二　飛田琴太　七
在河三蝶　市　幾治茂内　ム　里山　山
邦杏李　口　紀定丸　巳

画工
清長　ト　重政　ㇳ　政演　ハ　政美　ワ　春町　丁
春朗　ラ　在河三蝶　市　勝川春道　日　哥丸　九

鶴屋　蔦屋　伊世次

天慶和句文　ㇳ六
丈和ら作集托　万九
万象亭戯作の始　万リ

不案配所廬料理 工戸
閻羅とうちや皆里 入一
親をらせう桃太郎 入ト
人心一寸思ひ染井 弌戸
きゝはよい日本の智恵

奥村

化物和猫と拐る マソ
千挑五人在所 マソ
情中志をとみの経 マソ

百蔵集ちよつと来歴 丁丁
太平記万八講釈 キ一
梶原綱目二度めかけ 四丸
太平世界世の孫の身 二
亀枝のきさ第一 クカ

松村

館中八人まへ マド
浦島が坊誌の巻 穴ソ
法事世話の蒙栈 マソ

粋好やる大公 土ソ
八之一調の流 人六
大やまと智恵の親玉 甲
三四十大屋の地 飞甲
八代目桃太郎 平平
語同編がへ成長 土六
金々大通記 土六

西村

加孫拾加さ筆 山ソ
賛手弁惣人会 山

化物七段目 幺
よし原大通会 丁丁

新田通戦記 九巳
霊現竜宮かい マ一
運ひらく扇の紀書 ラ

鱗形

平朝萩入の娘
南世話問答
初雪四十き
桃太郎二度の掛
鶴多梢二階の手毛
今昔話袖之色

高麗村尖緒 ユ
今昔一万石の行巻 ユ

岩戸

今昔化物の親玉

当世太平記

万象亭一に竹杖為軽と号して狂歌を詠じて大に名あり年代記に云万象亭の作出所をおもしろくす或人云万象亭ハ古風来山人の門人なり戯作のことより此道に於て勝る浄角里ハ風来の作にならひて於ホ文化の初頃ゟ京伝の按合して上梓する近太平記と号す唐来三和此年より当る京政の中絶年て年に一二部ツヽ著す作数多からされとも妙作多くあるゆへ其根かく今の世に残る木廻文ハか記ある年に名あるし綫文の平次作にて止む是より後の綫文ハ去年青本の高紀ときまつ綫文にして出し一月かところて其青本ありして出たりしに大なる事

天明五年乙巳

作者
喜三二 キ
恋川好町 子
二水山人 二
画工
清長 ト
哥丸 九
勝花 カ
鶴屋
廓中丁子 一六
白ひん線香 一六

通笑 マ
蓬莱山人亀橋 白
鳴瀧 ロ
重政 一
勝川春英 大
柳郎 ア
蔦屋
鬼の宿夫大通之子 キ九
江戸生浮気樺焼 一六

京傳 一
夢中夢助 タ
録山人信射 三
政演 山
旭光 九

全交 入
政美 ソ
道麿 山

三和 三
春朗 戸
千代女 千
伊世次
百鬼夜講化物かたり
こさついそ酒の語 三九

高麗人文盲彙 入二
冒手合ちそつき義 白に
松作分事一 二ア
夢たら買くらおやせとろ ソ
奥村
千鶴楽木目の出 マ丹
二度おかこ嫁中物 マ一
五ごらおらち此劉者 マワ
手まち頭七ちのき歴 マ丹

堅みかの根か今の本末 三九
元利安出跡ある北い 子千
吉仏井のくふ 子九
書ちつ女茶の川て 三一
江戸春一夜千両
松村
慈今字治の宮犬 ヲ
親ちつアま鼻おちゐ テ

暑月宋婦之の在り 三九
西村
こしつけむさゝ物語 タカ
人生五十の寿 ロツ
おも情新来たいこ摺 ソ

嘸清き育ぬけ見事の工夫は對面の條々を當世の
人情權貴に阿諛するさまを写せりとて是世然
人情のうちも如ある事なしといふを諫めや古今作文の意
を帰家の厨房のさまを写し窃（盗）画あり此條は豊國
國貞抔て如る場に作をつくせとも清長等の作に
先鞭を着たり

天明六年　丙午

作者
喜三二　キ　通笑　て　京傳　山　全交　入　杜芳　土
万象　万　三和　三　三蝶　西　好町　子　飯嶋　白
琴太　ヒ　山東鶏告　山　芝甘交　廿　白雪　而　道笑　上
半片　八　自惚山人　戸　虚空山人　戸

画工
清長　ト　重政　上　政演　山　政美　ソ　春朗　西戸
春英　ト　三蝶　西　好町　子　蘭徳　廿

鶴屋　蔦屋　伊勢治

七福神年始の祝遊　ソ万　天道大ふく帳　ソキ　平かな盛衰記　西土
呂清撰の続宝　山万　江戸春一夜千両　山山　昔々おせね雲　西西

法富奥山羽衣 六 〃
南國若紫染 六 〃
反魂すご六 廿 上
望とゞく鯉追（身）の出勢 白 ソ
奥村
化物すき薬白髪 マ 央
大昔やうが附分 マ ソ
人面府勝手談合 マ ソ
一ッ星大嫌くさん マ ソ
始くへ苦ハ楽の種 マ

あく七変目景清 一 六
嬌八備百と紙利 子 子
去程ニ捕もの情 三 ソ
通言盛ぞろへ 入 土
松村
二一天作二五一十 マ 戸
亀人の外仙人亀 マ 六
ふと市天上見んきり 八 央
いくの代世四息 マ 土

大江山二朔の宗 七 申
絆屋話百物語 申 申
腹中掃除五臓の変 申
梅村
帳原紋腹の仲町 爾 戸
我家らく鐘念山 戸
亀丁相屋鼻比 三 六
新の相丸着目七虎占 土 六

懐中若ゑみぬひき マ
西村
平治太平記 マ
くさきすかひゝひ金の宗

西宮
大寄止らわけの滝へ 万 ソ

天道大福帳と云物出して天道様と云つもの白丁ニ日輪
の浄衣したる姿ニ画きしより後の稗史ニこの姿を多く画く事ニ成ぬ
もとより本つくしより稗史戯作を書ことゝなりてより
年代記ニ第一ゐしく利慶ニおちると云ふにはあらず

天明七年丁未

作者 喜三二 キ
万象 万
通笑 マ
画工 重政 亠
式上亭柳郎 卩
鶴屋
茶呑家内目傘 ソ入
嘘の木太平氣 一
艶男立ても色気 卜万

京伝 一
物蒙堂禮 カ
全交 入
鶴一斎雀千聲 一
政演 宀
政美 ソ
蔦屋
亀山人家妖 宀キ
面向不背御年玉 卩万
芝全交智恵の程 宀入

杜芳 土
鶏告 ゐ
三和 三
好丁 子
清長 卜
榮之 之
伊世次
おもて太平楽 ソ土
色男十人三文 ソ土
通言總籬

現金青本之通 一入
西村
かゝさ打添木鏡山
右通具あか探溯 卩
今勝々唐から菩我
加之手半不世人顔 宀土
村田
書あつめ手あまり噺

西札附名手呼記 ソ三
日本一あかり比鑑 子
三十ヶ年宮のさう人国 宀土
西宮
化物の楽屋本性 ゐ
是ハ是ハ人びて乃年 土

百文二朱もらかり 宀土
三年まちてふ蛇 宀土
てて嫗息子の気ときく 宀ゐ
世中の法事天文 宀カ
榎本

家に化物を書二ヶ肖像あり重政ヶ筆真書す画ける
といふへし稗史中紀者の小傳に擬たるもの春町の書
通號化物語す初見芝全交鶴亭の淫万象亭か戯作
乃ちも書てり京傳浮世代藤さみ一九戯作の稗本に書
修稿稿ゝあるへし

天明八年戊申

作者　喜三二　キ　通笑　マ　京傳　上　三和　三　杜芳　土
春町　丁　石山人　石　万宝　玉　虚空山人　戸　山東唐洲　广

画工　重政　一　政演　山　政美　ソ　哥丸　九　蘭徳　廿
春英　央　行麿　亍

鶴屋　蔦屋　伊世治

かゝ起打話のまつ里　一　广　文武二道万石通　キ　亍　一富士二鷹呼じけ茄子　土　ソ
中むかし才智義士の筆力　上　广　表紙娘ひいきの縁窓　丁　ソ　若い楽しみとこゝろ　广
酒宴の能化物の文　石　广　時代世話二挺つゝみ　一　亍　三つ茶太平記　ソ
化物義留剛帳　ソ　狂言末ひろの家　一　九

模文画今怪談　三

雪女そらの八郎　九广

西宮

金色自像物がみ　一六

名物梅枝ちんぷ　一六

源平兵太むすめ　玉ソ

おとし噺絵本伝

西村

二ッもし笑ひ酒宴　マリ

初春藝妓嫉妬の錢　戸ソ

おとし噺小只丸稽古画　リ

村田

昔々おぢんと云翁子　マ一

一ノ谷みちくさ軍記　史

榎本

富士見人穴見物　六一

今日現今湯記清　六一

小倉山時雨比翼説

此頃此種のやうな草紙の流行に徹して作るもの多しと
いへ梅亭が方なとしひねられし絵草紙年々に流行らさへし
是等もて此等外人の手なるつきぬあるされど識者の目に
留まらんとし又近く世に出たる天下一面鏡の梅鉢
在りし頃是等にも勝る趣あるつもりなり

寛政元年己酉

作者 春町 丁
鶴告 六
内新好 立

通笑 マ
桜川慈悲成 止
傳楽山人 イ

京傳 上
三橋喜三二 キ
伐木丁々 弌

全交 入
一橋山人 一
美息斎象睡 ク

三和 三
一陽春亭 ア

画工 重政 六
蘭徳 サ
歌川豊国

政演 六
春朗 ラ

政美 ツ

柳郎 ア

栄之 ツ

鶴屋
艶哉女仙人 上ツ
三川嶋御不動記 上六

蔦屋
鸚鵡返文武二道 丁ツ
きしも中洲話 上ツ

伊世次
福来る笑ひ門松 マ戸
かうそこ云名根の元 玉ロ

鉢みんとて二重命 入ツ
覿のやうに現寝夢 入ア

野とは七日忘とき 三ツ
地獄一面からと浄色 上六
早道節用守 上六

なひいき他の手 止ロ

大和田
孔子縞于時藍染 上六
一百三升芋地獄 上六
花の東頼朝公御入 上六
あら蜃気楼 一サ
浮芸今帆悉八丈 アツ

西宮
面之不材の合 六ツ
深の花枝ぶひいき 六ツ
手世わ東八人女 六ツ
三英性丈さくら 上六

榎本
延寿返魂丹 上六
研文谷到也比目許節 上六
一生入福財の幸 上六
草比世の中 立ツ
大千世界喜会縁

秩父

太平権現鎮座の始
[illegible]の由来
二[illegible]碑記
[illegible]寛永制
三所額より巡拝
[illegible]小人歌　ラ

[illegible]始めし孔子に佐太平権現まて皆南附の進事ま擬佐としまへし地蔵一面に幾人せ天下一面の擬所を俄しめすき一夢を都て中御孫太山何来して十七歳

大なる石の造るまま撫して中瀬の[illegible]妻[illegible]之[illegible]とろて又古張碑文云の仁皇利益あらしまよろし[illegible]示二至示中ろし眼前[illegible]節本多前時の[illegible]動も古人霊験あらしと云安永四年清経吟君すとの画きし一代記の額を古人再摺し錦絵摺の如勢を於て販行せる[illegible]青本子白紙墨摺の如勢を北したる舟も同じ古人の再摺すか古人まてい悪年をも制して販売をしる寛政の中頃よりか絶てなんあるさは文化の今書も絶まりてしまはい青本まて二七種よろつたる年[illegible]画し

寛政二年庚戌

作者
通笑 マ
信普 主
樹下石上 石
画工
重政 一
亀毛 ク

鶴屋

山郭公けころみな上 ツ 一
ひやうたい波之清久記 ツ 一
信やま重部山家 卩 入

京傳 一
慈悲成 山
蔦唐丸 廿
政演 山
桜文橋 文

蔦屋

玉みかき青砥の銭 九 廿
即席耳学問 一 マ
忠孝あをひ仕与 九 マ

全交 入
時鳥館 土
政美 ツ

伊世治

京存恭事をけ 口 玉
いろは酒ちらし氏やの 口 山
よろち丸を保屋 口 山

一万宝 玉
柳郎 卩

喜三二 キ
豊国 口

本れいうん世相 卩 入
西村
左吉子郎記一談
大和田
心学早染艸 ツ 一
京伝浮世の酔醒 ク 一

本来なまさる浮世 一 廿
西宮
人間万事西行猫 ソ 石
稜文
虚言浦嶌戯奥 ソ 三
奇貞正寶への念 文 三

榎本
花咲ちちおいのさら 山 ム
新作絵合せいえばさ
村田
蝶子名ひいさ比達級
春をけふ名戯

勧善くゞり雀（ソ 十二）

呼つぎ金の成る木（文 十）

早染草ハ善玉悪玉といふ事をこしらへしハ京伝か妙作にて甚世の意にかなひて大に行れて二編三編までいづる後世に善玉悪玉といふこと此草紙より起る歟青砥が銭は岩見の目録を若書七歳時のさまなり擬して作る此の翌年よりしてかゝる事を悔て絶て作り出さぬことゝなりたりき

寛政三年辛亥

作者

京傳（一）　全交（入）　万宝（玉）　[illegible]（廿）　新好（立）

夜道食記（久）　大栄山人（大）　秋収冬蔵（禾）　荒金土生（土）

画工

重政　政演　政美　柳郎　豊国

蘭徳　文橋　春英　菊亭

鶴屋　蔦屋　伊世次

九界十年色地獄（宀 二）　廬生夢魂其前日（ツ 二）　今昔[illegible]白績（口 廿）

八百万両金神花（ソ 二）　世上洒落見絵図（刁 二）　百[illegible]長命[illegible]（口 廿）

真手て讀人玉秋（ア 入）　人間一生胸算用（宀 二）　[illegible]山料理の[illegible]（史 玉）

女郎の誠玉子の角文字（七）　箱入娘面屋人魚（ソ 二）　[illegible]の[illegible]（史 玉）

右評判之外の文覚へ ソ 玉

西村

かゝ頭末宮とめくら ソ 久

大こ麻ぬけ目 □ 卅

西宮

壬生狂言名代の袖 立

くらべこし弾けぬ全 禾

おこし市振すじ百巻

秩父

壬生踊鉄炮の實

まつひ擂尼杦の澤秋 玉 少

榎本

諺子比庫比屯

たゝき文北郎の蒲縛 キ □

志の素椛代模様 玉 □

柿本ヶ花紀の抄説 玉 □

世の落ちこと傍有へ 玉 □

泉市

はつひ果て壬生狂言 大 □

豆蔵頭金山 廿

おつ桝の袖宮 廿

金銀吉原紀 玉 文

右義はいられ人金鉋心 工 ソ

京かのこ娘五色汁 入 □

幽霊ぐさらや傳 立 □

京傳作者仲間の大あたりをきこえ候ふゐしまつは是壬生

踊といふ為流行して是は横を絶妙也　北尾政演か

妻物を画く事筆にして止む

寛政四年壬子

作者
京傳 亠
全交 入
慈悲成 山
楚満人 人
万宝
井上勝町 井
氣象天業 天
[illegible]彦 云
黒木 甲

画工
重政 亠
政美 ソ
豊国 口
蘭徳 廿
清長 ト
春英 歩
井上勝町 井

鶴屋
鼻の下長物かたり 入 ソ
[illegible]思ひよら豆 亠 ソ
化物つれ〳〵草 亠 リ
神[illegible]略[illegible]乃油 天 [illegible]
朝比奈異国めくり 亠 亠

西村
[illegible]の化物 亠 口
[illegible]国[illegible] 亠 口
勇士[illegible]紀[illegible]話 サ
紅白軍[illegible]の語 ソ

蔦屋
桃太郎発端話説 亠 戸
実語教おさな講釈 亠 戸
梁山一歩談 亠 亠
安荘子胡蝶乃夢 甲 戸

西宮
軍略[illegible]の武田[illegible] 石 ソ

[illegible]文屋
真すみ此かゝみ 云 サ
孝行[illegible]

伊勢治
春ハ花作[illegible]の八[illegible] 玉 央
昔と今南楼の通話
頼朝一代記 人 ト

村田
[illegible] 央
山[illegible]昔[illegible] 央

泉市
浮世[illegible]九面小面 入 口
[illegible]二代かゝみ 井 井
一心[illegible]
源平軍物語 ソ

芝全交が奇語大に名あり此時に杜若が作を同し
趣向にて紀年号を追ひ作者にて記してこれ全交が作を
見んに擬して秘蔵する画本ありて筆地茎好事小国和哥読
続篇とすべし　栗山が当読の戯作の続篇を作れり
綴りて古冊十四丁をまして止む又世の戯作の続篇をして
見るに倣へりて真すみにかみ新作忠臣蔵天神記の頭を振て
なる頃一九が随筆にいふ猿猴戯作記ありその作紀和をる
し此仮名手本年号をかしこに快挙おもひし又一代記
筆者此頃の年の新板多く快挙額縁にて
銭仮に楼上に歩みて世の者の冗談街談巷説を聞ことを

僅かに此板元の作を探りたるなり

寛政五年癸丑

作者					
京傳 一	全交 八	三和 三	石上 石	楚満人 人
曲亭馬琴 四	鹿杖真顔 十	桃栗山人 九	烟草助 次	

画工				
重政 一	政美 ツ	春朗 戸	豊国 口	清長 ト

鶴屋	蔦屋	榎本
龍宮苦界玉手箱 二二	貧福両道中記 二戸	若般若心経中記 人
福徳果報兵衛伝 二二	小人国毇桜 二二	文覚上勧進帳 人口

新板諸方はら庄年興六　上下
まつさか百法千万義　二二
十四循環ぞろ九月　二入
白髪明神お稲荷　二入
紙ノ西爰都の一路　ツ日

西村
翔鳳宗当当哉　口丗
咲乙丁化物庄編　口丗
権の庄今年おぼろ　口丗

昔語年むかしやつをし　ツ二
花の笑七福貸　二二
人心只一人いのち　二三
何人つの南瓜ちやつをし　二二
借金笑中の世喜話　二二
先咲く梅の赤斗　二二
めぐる逢報斗弐銭　ツ三

西宮
万福長者の傳　ツ石

大和田
節分の豆まくいけ物苑　ツ日
十二神家之遊葉　ツ火
紺舟至知らし浩　ツ火
亀山の天狗の娘　ツ日

泉市
深山生男女のくら袴　口入
年寄のひやかし哉　口入
とらけ百人一首　口十
風たくさ佐男神　口入

秩父
大仕掛三番叟哉　口十
天狗傑作の山ぶ子　口ル
里から来た女達　口ル

於つた路乳唐劫記　口日

曲亭馬琴出る已前より年々に絵さうし甚盛し天保の今まで至るまで無人の作者なし　唐衣橘洲は狂歌の元祖とよびまゝ俳諧歌の宗匠なり　桃栗山人ハ一号烏亭焉馬おとし咄の中興なり

寛政六年甲寅

作者
京傳 二
真顔 ナ
築地善好 子
画工
重政 二
鶴屋
全交法師つれ〳〵草 入 二
眉に天人三人生忌い 二 二
忠臣蔵即席料理 二 二
升森花宝氏山御色 子 二

全交 入
馬琴 ヨ
政美 ツ
蔦屋
金々先生造化の夢 二 二
根は草筆武者之人 二 二
忠臣蔵前世の幕无 二 二
福寿海无量品玉 ヨ ラ

森羅亭 木
式亭三馬 エ
春朗 ラ

石上 石
千差万別 千
春英 ヰ
榎本
工面〳〵たら何太通 木 ツ
百福寿老人 石 ツ
（仙）仙伝秘法顔向草 千 ツ
野ぎ打悟吾二千巻 ヰ 口

芝甘交 ヰ
南杣笑楚満人 五
豊国 口

西村
鉢かつき物かたり ヰ 口
忠臣全氏絵人 ツ
絵平阿房ふくろ ヰ 口
村田
春怪お伽のお門 二
小人国七里寓去
源平布引の瀧 丈

西宮
天道浮世の出星操 土 口
大福長者蔵 石 ツ
人間一心のぞきからくり エ 口

泉市
みそいえて磨ぬ光 五 ラ
忠臣蔵やつして幕安 三 口
百人首物とも講釈 入 口
揚屋町紛庭風さや 十 口

早稲田大学図書

式亭三馬か云全交か作の類を慕ふて世俗の流を穿
ちたるを得たり妙絶なり　樹下石上福禄寿の類を
年々作りしより綴りて名とも文辞丈の一家と称す
年代記をかきものハ人々目前の事を好むものへまかりく
綴られたることの花　石上云ふ物書家堂記と号した

寛政七年乙卯

作者　通笑 マ　森羅亭 木　三和 三　樵浦人 人　慈悲成 ヱ
馬琴 ヨ　善好 子　将平 ヱ
十返舎一九 十　黄亀 ク

画工　重政 ヱ　政美 ツ　栄之 ツ　豊国 口　春朗 ラ
斎春 丁　長喜 キ　一九 一

鶴屋
紀之の咲日花子 ヨ 一
夜半の君か残念云 一
玉川小田原お夜着 子 一
浮気窓成おるひかけ小丁 キ

西村
内新好勤忠性 ヱ 口

蔦屋
善悪邯鄲大勘定 三 一
新宮小判の再来 十 十
仏学咄升くさ 十 十
寿娘活花子宝の瑞杖 十 十

西宮
化物御色紙難波 ク ツ

榎本
万々諷諫弥の桂之 木 丁
手前廣末穂の滝ら ヱ ラ
素見みり世算 ヱ ラ
新版欲の頌の足 人

泉市
苑の気負相撲首枝 木 ク

よみ人相見世物　廿口

村田

桃食三人子たから備　マキ
根元曽我の出入物　キ
おとし咄家の元ひ帳

継子孫縁記の合性　ツ
碁太平記白石噺　口

いのちは無常は富士二人　廿口
大むかし化物双紙　廿口
かたき討義女の英　人口

楚満人義女の英大にあたりて十余年すたれたるかたきうちを再興し是より年ごとに續出し文化に至りて大に行はれいにしへの印とも云へし　十返舎一九ある作の繪ものしこともちへしも年ことに著述し文體にいたり又滑稽本にひさ更に大に名あり

寛政八年丙辰

作者　京傳 ニ　石上 石　馬琴 ヨ　一九 十　善文 六　宝倉堂 主
誹諧堂景則 日　楽山人馬笑 丈　春道草樹 中　望月窓秋輔 禾

画工　重政 二　豊国 口　一九 十　春朗 ラ

鶴屋

鬼殺心角樽　二一
唐土唐人公経　二六
隅田川柳のきれ筆　二ヨ
石よかし今へ鐵の稜　二ヨ
かたき打猿のうまれ男　二ヨ

蔦屋

諺中句はなし　二六
人心かゝみの写絵　二六
早扇指南字双紙　二ヨ
昔語桃のよめ入　二日
怪談筆はしめ　十十

榎本

常盤の國風記　十十
初晴山手習状　十十
怪席料理献立　禾ツ

曲亭増補万八傳　上ヨ
情念子安全懐との談　上ヨ
西村
柳糸花録の塵　ヹラ
村田
法的可肝人の家学　十
さらひ浮雲小文会　十

紀州年中行事　十十
紀角小つの色杖　十十
西家
性くへ分根がて花　大口
早跡勤子王和との語　十十
多子福万寿の根　石口
白石名子七綴編　口
岩戸
性愛紀角斉杭程　中口
類本紀角の変　十十

泉市
執柄本印　口
椰ぶら叢術の毫　十十
書海波鏡の部　十十
千里一足ね雪の迎　十十

江膝偽学女で　卜十 十
歌の徳すもの名　主口

北尾政美青本を画し此年に至る迄浮世画風を
変し蕙斎紹真と称し略画式を著し大に行る

寛政九年丁巳

作者　京傳　楚満人　石上　慈悲成　唐丸　馬琴
三馬　一九　馬笑
画工　重政　豊国　一九　春朗

鶴屋

三歳図会稚講釈　亠亠
正月故事談　亠亠
無筆節用似字尽　亠ヨ
安部清明一代八卦　亠ヨ
加古川本草綱目　亠ヨ

蔦屋

霊法清浄日之道　亠亠
武者合天狗俳諧　亠ヨ
楠正成軍慮の智恵輪　亠ヨ
泰山権現[illegible]　亠
嘘から出た実さうし　亠亠

榎本

おつかな師匠開帳　十十
今昔柳の報を道　十十
談かれ茶釜つる　十十
賀福水かゝ論　十十

松緑鶴郎房の言葉　亠ヨ
太々梅金の花見之　亠ヨ
庭梅子琉物蒔絵　亠ヨ

西村

押のつる恭行てよ文　口丷
福徳寿子ゝ自然録　口丷
晴名ゝ文字都言の語　ラ丷

村田

山花草からのさら系　十十

北窓悦札も方便　亠ヨ
諺ゝ若貴の玉杖　亠ヨ
亀代一年帳略縁記　亠广

西宮

さるつくの宝化山吹　口石
年よりかり神らゝ話　十十
太平記大札儀中　十十
義目出度月乃内　十十

岩戸

怪談乃識の杯　十十

泉市

今度ハ児もとてこ　口人
紀南大の門に　口人
かくて八百万神一坐　口矢
兵大の名趣の智画備　口工
かゝ寺焼立て山　口人
冨士の文様の義　口人
甚全交盃のれもさい　口工

家内安全鼠の文 十十

女臣店請状 十十

鶴花ひんの揚柱 十十

今生の基礎母 十十

京伝の作ハ年を追ふて巧ミに新利をとりて戯作の体

をあらためしかば年々ニ勧懲をつとむ　次

寛政十年戊午

作者　京伝 上　三和 三　楚満人 人　石上 石　芝甘交 山　馬琴 ヨ

三馬 工　一九 十　唐丸 广

恋川春町遺稿 イ　壁前亭九年坊 九　傀儡子 白　関天会鶴成 ゆ

画工　重政 一　豊国 口　可候 可　清長 ト　葉峯楊見 山

栄昌 日　春亭 下

鶴屋　蔦屋　榎本

百鬼昼夜行 一一　人間一生四道話 一一　玉姫宝の縁角 十十

見利かま縫の話 上下　蝶義物語乙女夢路 上三　風まくり賑用ん 十十

時代その足利機杼 一イ　須臾の間方 一イ　十返舎戯作の種本 十十

条ね菜文ちて字操　一ヨ
湯屋ぬる女一ト浄るり　一丗
西村
雲乃上道中記　十十
岩戸
福外江の浮屋　十十
西宮風呂略縁起　十十
かつこれ庵主　十十

郷ら山伏杭の志めし　一广
一新價万両圓春　二二
家内平安用心蔵　二三
大雑書めぐり縁起　一ヨ
鼻の下先生咄集　一ヨ
西宮
寝語夢談夜咄　口工
東海道娘かたき討　口工
みかき浄そら仏法読　口工
こまかき雪学画の錦　口石

増補曽我中記　丁十
泉市
後はゝみ膝のかりこ　口工
一程雲梳の玉入　口人
百人一首たはれ眠　口立
怪談奇（き）発（ハチ）情（ゼウ）　口少
寳屋
其て球かしい首の編　日九

村田
増補大星縁記　十十
一陽来復帖　十十

山口
化物やまと本草　一百
寓中の足延かり町　十十

卿府吉耕治（廃）　日九
児宛桃竹苔の玉伝　口九
縁みすしく宝恋合　日九
蓮の糸妙井の花道　九

東海道娘かたき討　豊国の孫路みよはらのしの出
大半行なる　壁年九年坊如悦甚いた終る一年子
しとく止む情む庵し

寛政十一年己未

作者 京傳ニ 楚満人人 芸琲成ヱ 石上石 馬琴ヨ 三馬エ

一九十 鈍亀荘英廿 蘭奢亭香保留禾

画工 重政ニ 豊国口 一九十 春亭丁 豊丸九

鶴屋
京伝主十六利鑑 ニニ
五体和合物かたり ニ口
鎧居櫻花より讀縁 ヨニ
料理茶話即席噺 新 ヨニ
玄宗えしくし揮の芸 ヨニ

蔦屋
かゝ子守重花の德之 ニ口
高民ホ善悪日記 ニニ
風流竹女せつ用 ヨニ
安の婆口から継屋 ヨニ

榎本
吉岡紀年ヒへつゝ 廿丁
扇子三枝乱花の流壁 廿丁
大縁き年の貢 十十
仮宿代所用写台 廿九

鍬さし両川将ゆら ヨニ

西村
紙衣根之浮錦 ヱ口
竹本義太夫ふし 十十

村田
運ひらく太平傘 十十
分さる菜の海 十十
究竟こ柄の家紅 十十
いろは雑弁 十十

西宮
倭太平記向鉢巻 エニ
打出丁雲女まく明 エニ
今のうゝ子本覚記の字書 石口

岩戸
厭小亭度幻女の仇討 十十
茜稲井戸浦道笑 木十

泉市
雛作のいと盛衰 人口
幸後へ別徳行 人口
金々先継家隠居 石口
かくさき沖津白浪 人口

山口
三千石紀の姫 十十
萩草梅の先陣 十十

梅の天臣より以後の事を著し上梓せらるゝ京傳作か
みは悦ばれさりしにや大坂の年記まであまた見えてたる京傳
已後は上梓を悦ばずありしに古人となりて後京傳の画山
の後年古實（閣）記上梓して大坂紀行またまたありて本年等の
つきありを記し又豊國の古閣記の錦絵あるし芸事紀行の遊か
いろ程もなくて古の如し悦ばるゝことなかりたまへ
去年平川佛まで餘を旗ることを事に擬して作者本二郎
平川自身ら当年の貢あり　儀右手記信はいさみ大言記
といふ三馬が妙作ありしに流行て文あるてかのつ男を蔵版と
せらむ版は世上にもかゝりかし

寛政十二年庚申

作者　京傳 上　楚滿人 人　芝甘交 廿　馬琴 ヨ　一九 十　石上 石
紙子亭和楮 ロ　色主 ソ　可候 ロ　蘭著亭香保留 未
画工　重政 六　可候 ロ　豊國 口　子興 子

鶴屋
甘泉の名利記 ユユ
たとへの人戯場禅 一ヨ
みな菜屋の引札 一ヨ
錦の宝はなつかし 一ヨ
人間万事塞翁馬 一ヨ

蔦屋
年中行事四季 ユ口
銅人形かは九枚 一ヨ
備前すり鉢下御記 一ヨ
竈将軍勘略の巻 百百

榎本
今世異様の色男
男達はつまの深緑
増補大江山酒呑 十十

聞合作新聞説　二冊

西村

見めぐり閑談之記　十十

目出度人目の紀術　十十

君が抱者乃　〃

男一雨髪ぬき鏡　〃

お俤小栄の下続　小小

怪談すて猫　十十

村田

子供風名所　十十

西宮

子どもも全七数の続　木口

巻紙白見ぬの全括　石口

岩戸

雪遊進歴の人気字　午口

おん多縁唐まちめつの

本かかき楼百人合戦

泉市

二重繰三絃年　江口

運茅出雲の縁組　十十

娘がさき打扇の組画　人口

二ツ対栄花の春宵　石口

山口

夢之噂風塵記　二口

諺にまかす世人の情

人間万事二十五作の五

當福さんばつ流行　十十

出世鯉男武勇　十十

如是ゝ将軍ハ北斎の画をかり可惜ハ候事設ける房之長とか
二三年隠しおる世人の情と二十五作の五ハ天明の流乃植と
再掲して和歌の扉をさらへ両国をも新しき近頼の部
新しき御冥快をすゞ新枝の衣袖を葺ける景色
新枝の衣袖おはせ出来る御芝居の本つくあるへき流

享和元年辛酉

作者　京傳エ　樵瀟人人　慈悲成ユ　馬琴ヨ　三馬エ　一九十

傀儡子田　可候石　和梅门

竹塚東子竹　香保留禾　福亭三笑ネ　玉亭玉

画工　重政上　可候石　豊國口　春亭丁　子興子

歌川豊廣广

鶴屋

かなてほん忠臣蔵　上上

絵と罪たゝ風の[illegible]　ヨ上

敵討雪松の若緑　ヨ子

親の敵討[illegible]物語　田口

昼寝[illegible]此後の[illegible]　ヨ上

かたき討[illegible]千里眼　ヨ上

吉備[illegible]の祭青[illegible]　ヨ上

雲龍御[illegible]の羽衣　竹上

西村

くゞらに一葉平敷　ユ口

横川[illegible]の[illegible]　ユ口

かたき討桐の一葉　十十

[illegible]の海原　十十

蔦屋

古今咄し男物語　上上

曲亭一風京傳張　ヨ上

春乃駒[illegible]道　ヨ上

見ぬ孫[illegible]吉原[illegible]　石石

西宮

[illegible]自惚[illegible]　エ口

世[illegible]子安[illegible]　禾子

夫[illegible]来る　ネ子

かたき討根無乃[illegible]　石口

岩戸

縁[illegible]の[illegible]　门子

榎本

坂東七芝居　十十

[illegible]三年酒　十十

会津[illegible]　十十

春霞男[illegible]　十十

泉市

日昇[illegible]此鍾　エ口

[illegible]第　十十

寓意[illegible]の年玉　石口

かたき討[illegible]の[illegible]記　人口

山口

かたき討梅のつぎ穂　人广

仮名手本忠臣蔵　十十

村田　[illegible]の[illegible]場 十十　人心[illegible] 十十

画草素人怪 十十　いろは縁起 十十　絵本かこさお 口玉

色あげ菊の文 十十

おし[illegible]福[illegible] 十十

享和二年壬戌

作者　京伝 ヱ　楚満人 人　馬琴 ヨ　三馬 エ　一九 十　新好 立

通笑 マ　馬笑 大　倪々子 由　石上 石　慈悲成 立

感和亭鬼武 ム　木芽亭因楽 木　一磨 广

画工　重政 一　豊国 口　歌丸 丸　豊広 广　長喜 キ

春扇 天　菊丸 勺

鶴屋　蔦屋　榎本

[illegible]地の錢芝記 十十　[illegible]七人[illegible] 十十　旅の[illegible] 十十

春こん[illegible]霊宝縁起 十十　[illegible]役 十十　[illegible]家男[illegible] 十十

[illegible]入道[illegible] 一一　六冊かゝ絵用草紙 一ヨ　[illegible]の[illegible] 十十

[illegible]の利生 一口　世帯評判記 口ヨ　泉市

早[illegible]年紀 キヨ　西宮　[illegible]温石[illegible]記 广エ

[illegible]三世相 一ヨ　[illegible]年代記 エエ　[illegible]男 广人

かね[illegible] 一ヨ　ひんと[illegible] 广エ　[illegible]の[illegible] 广人

義号歌のかるた　一ヨ
和朧香の揚合銭　一マ
桃灯て闇の七役　一木
太平記忠臣講釈　口白
西村
咲れは花の雪と絞り　九立
紀いの風月尋常　九十
かな手本時雨の友　广人
一粒万倍の稽古　广丄

無茶い浪花新涙秋　工天
合能山宝の筆同子　口石
山口
也ろうしろ新学館　工口
異容いひき竹　十ム
忠臣をと物くろ　十于
東川年代種本　十十
村田
声中大根窟　十十
増画山吉左衛　十十

忠室右仰武勇緒　广人
大福長寿傳　广石
岩戸
恋いやつと五九他　十十
今評興年貢　广キ
いろ男程の金もと　十十
かな手本艶の露　勹十
通人の猶こと　月十

右傳絲識出記より大悪利害中にて字郎を四季に合せて物揃て
六冊初上冊は上冊合せて表紙は上の如き表紙は大字を書
稲ほしの画も今これ権輿として言つきて乳語屋の外此時より
和語を揃ふ老き翁より年に同し蓑笠人かきおく大字
紛かれ志室右仰由緒にて卯年に六冊後者て出る時三郎新打
六冊あさ后蓑筆録中作の趣旨の六冊を毎へとせしむ
とん

享和三年癸亥

作者
京傳エ　楚満人人　馬琴ヨ　三馬エ　一九十　可候百
鬼武ム　三笑大　石上石　曽呂利戸　板本舎邑二卜
楓亭猶錦凡　蔌庵萩声サ　徳永素秋主　蒲川八重成八

画工
重政エ　豊国口　可候百　豊廣广　長喜キ　一九十
春亭丁　秀麿乃　一九門人 ゑい女ゑ

鶴屋
悟道迷所独案内　エエ
裡やさん見通庭補　エエ
人間万事吹矢の的　エエ
[illegible]　ヨエ
[illegible]　ヨエ
[illegible]　百百

西村
善悪角力勝負附　十口
さくら流し[illegible]仕上の押絵　八キ
いなの月嵐のよみ入　十キ
本桜の森林の[illegible]打　十口
か[illegible]の木　人广

村田

蔦屋
分解道胸中双六　エエ
[illegible]　エエ
[illegible]中物語　乃ヨ
[illegible]料理　百百

西宮
か[illegible]物語　凡广
月[illegible]　主广

岩戸
通俗三呑志　サキ
大中黒（アたり）本種　戸キ
[illegible]　人广

榎本
慎道速話し　ム丁
[illegible]合戦之辻

泉市
[illegible]出世話　人广
[illegible]車　人广
[illegible]娘　人广
果報[illegible]子の話　ネ广
[illegible]　石广

山口
和漢らん[illegible]語　ム百
[illegible]　十十
[illegible]梅　ム

家訓ふたき叢 十忠

蘆江錢丈の上手なるを出し錢丈を生捕に揃へる芝居より
さればこの上手を離れに揃て神雅に財をあつめて表紙を厚し
贅升の字にて主屋にはさまへ一兒童の読本すべきあるに
あるに此上手に出しは錢丈のいたく作りて世にまちまちを出して
出来り候年会當の事なるに候はい二三部を上手ありて
今是より文よりまた年にこれより居りて居る事

文化元年甲子

作者　京傳 上　楚満人 人　石上 石　馬琴 ヨ　一九 十　東子 个
　　　森城山家女 上　待名斎今也 子

画工　重政 上　豊國 口　春亭 下　豊廣 广　長喜 キ　月麿 月
　　　北斎 七

鶴屋
作者胎内十月図 一上
江戸砂子娘敵討 一上
小紋中山夜啼の石宝 广ヨ
多今市ひなが物語 上上

蔦屋
五人切西瓜の立賣 一上
七つろ合点かね 上上
稲の町東三階奇談 上ヨ
かな手三人長者 上ヨ

西村
かたき討孝行車 口人
月 蓮の字環 广人
月 長吉郎やまき 广人
意気紀手枕の助 十

新板十六むさし坊（ヨ亠）

泉市

万福長者宝気[illegible]究（石广）

かたき討ゆつり鏡（人广）

（親子流 前編）冬雪物語（人广）

（同 後編）春雪物語（人广）

（同）春の手枕（ネ广）

村田

かたき討桔梗の家（十月）

西宮

打あてゝ小桃の雪（土七）

素性紙千金牛（人广）

かたき討ほまれの一文字（个广）

山口

新曲五大力（キ）

人は歌ゟ迷しに（九九）

岩戸屋

龍神手鏡紀（十丁）

榎本

敵討猿蕃（番）場梅屏（十キ）

かたき討もの此頃より行はる京傳馬琴も此年より
始て敵討の作あり今年の新刻かたき討もの二十余種にて
其余ハつゝの手鏡仮名あり

文化二年乙丑

作者

京傳（工）

楚満人（人）

石上（石）

馬琴（ヨ）

三馬（工）

一九（十）

素速斎（土）

東業（个）

新好（立）

鬼武（ム）

萩声（廿）

画工

重政（工）

豊国（口）

豊廣（广）

赤城山人（土）

月麿（月）

石上（石）

画徳斎文哉（夫）

寉屋

かたき打家茶乃姫　二二

楠の書名菊のつ風　ヲ口

かたき打あやめの杉　广

殺のかたき理の天敵　二个

泉市

鵆ともみと記紫中芝　广工

金のなる木宗兄の緑継　广右

かたき打三組盃　广人

月ゑの川手鑑　广人

若屋

浮世自慢屋尾島今

誹諧浄瑠璃之の善

如鸞鶴之の尾張る

打出る札所の華

西宮

契のかたき打土手の青蓑　工广

今剣男吉原の鏡　土广

西村

かたき打思ひの外の猿

新田山女のさく花

かたき打梅と桜

五風十雨桜の嫁

怪談目夜叉鏡　主石

山口

今昔本もとむと　十十

滑稽さつこ飯　十月

同みやこ錦　人广

岩戸

早替り平家物語　立

茶漬の果出家髪　廿广

花吉みか二人鞍馬　立月

森治

悟迷てんか鬼武　ム广

かたき打今象のつ絵　夫广

村田

かたき打かくれ家の巻　十月

右年乃新梓いよいよかたき打類作の中に総十餘部まてなるによりて年々出板かたき討とみなす

20
25

文化三年 丙寅

作者 京傳 楚満人 馬琴 一九 石上 墨武ム
焉馬戯 面徳斎夫成 蘭衣サ

画工 重政 豊國 豊廣 國長ト 春亭丁 國丸九

鶴屋

かたきうちそゝろ車 立亣
同 孫太郎虫 口一六
同 さゝ衣物語 一ヨ
武者修行木斎伝 广ヨ
かたきうち鵙まくら 一ヨ

蔦屋

かたきうちおいぬだの原 口一
大磯の客揚子話 一ヨ

西村 北馬ヨ

かたきうち柳原箭 口人
同 いろは勢扇 广人
音信と安ひ縁村 广人
紙治宗刀の説話 口十
朝のかたきうつの出度 广人

泉市

かたきうち瑞貨葉衿 石ト
同 嘗酒屋 广人
同 増補婉姥山 广人
同 讃城袋 广人
同 二本の川 广人

村田

響八千里虎尾滝 ム丁

岩戸

義経富貴金銭 十丁

怪談おそろ史記
楠ともかしこの巻 广人
那須大津画の由来 立九

山口

花算大名り色 十十
かゝさむらいかたり サヨ
かたきうちこちの世界 十十
青嵐都のわかれ 十十

今年此新板する、かたきうちものゝ多き紙名
乃ちそれを記するの御代の静なる事を祝してたゞ紙とめる云氏

抑古れ戯作の戯は中古宝暦乃末頃より始り安永の
春町喜三二に傳え享和年中より盛となりし戯の字古の
時に至りて頗る行はれし時に至りて魚の式亭三馬
この作雷太郎合巻のはじめといふべし其外世上
新作史書へうつし合巻と為り年々に増加し合年
合巻と為りて今に盛んに行はれ年々に合巻を出
より種々しく次の合巻部に出し置